

戦場のオフィスレディ

【襲来アビス・ヘクサ！ O.L制服を剥ぐ機械姦♡】

【ただの事務員が、即席パイロットへ覚醒！？】

【苗木化の絶望を、限界突破の快樂出力に変える♡】

【オルガ・コード：ヘクサシリーズ】

生体ユニット・機械姦・快樂落ち・尊嚴破壊

本格ディストピア戦闘メカアクション・ハードSF

著：XYZ_L

戦場のオフィスレディ



鉄の化け物に強制絶頂させられ生きたパーツになる系
ディストピア・ハードSF・メカ・バトルホラー
「オルガ・コード：ヘクサ」シリーズ

著:XYZ_L

0.【就業規則】業務適性「C」のルーティン

「効率」こそが正義とされるこの要塞都市で、私の価値は紙屑一枚にも満たなかった。

聖暦2028年。

人類が築き上げた連合要塞都市は冷徹な論理によって統治されている。

適性がある者は空を駆ける鉄の巨人「オルガマシン」の心臓となり、適性なき者は都市を維持するための歯車として日の当たらないブロックで摩耗していく。

私は後者だった。

かつて候補生訓練でシートから突き出たデバイスに肉体を暴かれたあの日。

女性の極限の羞恥と快楽を、無理やり兵器の出力へと変換する狂ったシステム。

脳を焼き切るような快楽の奔流に耐えきれず、白目を剥いて失神した私の鼻腔には、今も焦げたオゾンと自身の粘つく愛液の匂いがこびりついている。

生きた動力炉（バッテリー）になれなかった私に下された評価は、残酷なまでに短い一文字——「C」。

「非効率」の烙印を押された私はパイロットスーツを脱ぎ、窮屈なタイトスカートと事務員としての仮面を身に纏った。

股間に埋め込まれた、もはや熱を持つことのないクリトリスチップの硬質な違和感だけが、かつて戦士を目指した自分との唯一の接点だった。

空調の唸る無機質なオフィス。

響き渡るのは敵を屠るための咆哮ではなく、単調なキーボードの打鍵音。

そうした無機質な日常が続く——はずだった。

高次元の捕食者たるアビス・ヘクサが、私たちの「日常」という名の安全圏を食い破るまでは。

1.【突発事案】アポなしの来訪者と物理的リストラ

連合要塞都市、第7業務ブロック。

無機質なタイピング音だけが、空調の低い唸り声に混じって響いていた。

私の名前はミサキ。

ストレートの黒髪ボブを揺らし、知的な印象を与える眼鏡だけが取り柄のただの事務員だ。

ズ.....ン.....。

遠くで微弱な振動が床を伝わってくる。

「.....また演習かしら」

私はアラートから目を離さずに呟いた。

この要塞都市では、連合のオルガマシン部隊と廃墟の民との小競り合いや、AI制御のハウンドを使った実弾演習の爆発音はもはや日常の一部だ。

『.....目標効率まで、あとマイナス3.4%』

視界の端に表示される冷たいアラートが私の無能を責め立てる。

かつては私もあの空を駆けるオルガマシンのパイロットを夢見ていた。

けれど私に与えられた適性はC。

候補生訓練で脱落した私は、今や「非効率」な人材として膨大なデータの仕分け作業に従事している。

このタイトスカートの下、候補生時代の訓練で引き締まった臀部には今も劣等感の証が埋め込まれていた。

何の役にも立たないあのクリトリスチップが、ネイビーブルーのレースショーツ越しにまるでその存在を主張するかのよう肌へ食い込んでいる。

「ミサキ先輩、このデータ、エラーが出ちゃって.....」

後輩のアヤノが不安げに声をかけてくる。

ウェーブのかかった茶髪が揺れ、少し大きめのブラウスが彼女の華奢な身体を包んでいた。

下着はきっと彼女らしい真っ白な Cotton のものだろう。

守ってあげたくなるような小動物系の後輩だ。

「大丈夫。ここの参照コードがズレてるだけだから」

私がマウスを操作して修正を終えると、隣のデスクのサトコ先輩がわざとらしく溜息をついた。

彼女は豊満な胸を誇示するようにブラウスのボタンを二つも開け、巻いた髪をかき上げる。

タイトスカート越しにも挑発的な黒いTバックのラインが浮かんでいた。

「いいわね、アヤノちゃんは。ミサキさんが元候補生だから、PCトラブルにも強くて」

サトコ先輩の意地悪な言い回しに、アヤノが困ったように肩をすくめて俯く。

私は喉元まで出かかった「サトコ先輩こそ、PC操作が苦手なのを忘れたんですか？」という反論を、事務員としての仮面の裏に押し殺した。

ここでは「非効率な事務員」でいることが、最も効率的な生存戦略なのだから。

サトコ先輩の視線が窓の外へと向く。

「.....あら、また揺れてる。演習が激しいわね」

先輩が言い終わるか終わらないかの瞬間だった。

キィィィン————。

今までの振動とは比較にならない、耳を裂くような金属音がフロアを貫く。

直後、脳を揺らすような衝撃波がオフィスを襲った。

ガラス窓が一斉に粉砕され、悲鳴を上げる間もなく、私たちのすぐ側の壁が凄まじい爆音と共に内側へ向けて爆散する。

「嫌あああッ!？」

サトコ先輩の短い悲鳴。

強烈な爆風に吹き飛ばされ、私はOAフロアの固い床へと強く打ちつけられた。

眼鏡が衝撃で大きくズレる。

肺から酸素を強制的に吐き出され、激しく咳き込んだ。

焦げたオゾン臭とともに、コンクリートの灰にまみれた粉塵が視界を真っ白に染め上げる。

視界が晴れた先に佇んでいた「それ」は、私たちが知るどの兵器とも違っていた。

分厚い装甲板をリベットで無理やり接合したかのような、無骨で醜悪なシルエット。

赤い単眼を不気味に発光させる、鉄と油の塊のような巨人。

それはビルの外壁をぶち破り、ひしゃげたオフィス内へその巨躯の上半身を強引にねじ込んできていた。

「ひっ……あ……あ……」

アヤノが灰まみれの床で腰を抜かし、涙目でガタガタと身体を震わせている。

巨人が無造作に腕を振り下ろした。

凄まじい風切り音と共に、私たちのデータサーバーが火花を散らして紙くずのように粉碎される。

崩れ落ちた壁の隙間から、眼下の道路の凄惨な景色が完全に露わになった。

地獄だ。

私たちのオフィスの目と鼻の先を守るように配備されていた連合の量産型オルガマシン「セクター」。

私とその仕様を熟知している全高12mの灰色の機体は、オフィスへ上半身を突っ込んでいるこの醜悪な巨人の足元——アスファルトの路上で、圧倒的な質量によって完全に踏み躪られていた。

目算でセクターの優に1.5倍。

およそ18mクラスの規格外の巨躯だ。

引き剥がされたセクターの胸部装甲の隙間、露出したコックピットに向けて、巨人の脚部から伸びた無数の銀黒のデータスパイクが蛇のように蠢きながら突き立てられていく。

『ああんっ！ いやっ、やめてえ！ 子宮が、こわれ、るうっ...♥』

機体の外部スピーカーから、物理ハッキングを受けたパイロットの屈辱的な絶頂の叫びが大音量でフロアに響き渡る。

吹き飛んだ壁の開口部から、潰れたコックピットより漏れ出た冷却液と、むせ返るような雌のフェロモン臭が混ざり合った異様な匂いが、上昇気流となる熱風に乗って一気に私たちの室内へ吹き込んできた。

「逃げて！」

私が叫ぶのと同時に、ビルの破壊された天井や壁の隙間から、さらに小型の人間大の機械兵が次々と滑り降りてきた。

オフィスは一瞬にして阿鼻叫喚の狩場と化す。

逃げ惑う同僚たち。

私たちの薄い制服は、この暴力的な現実の前であまりにも無力だった。

圧倒的な死の恐怖。

環境を蹂躪する、淫らで悍ましい体液の匂い。

その極限の拒絶反応に呼応するかのよう、私の下腹部の奥深く、とうに機能を停止したはずの微小な金属片——休眠状態のクリトリスチップが、ドクドクと不気味な熱を持ち始めた。

2.【不当配置】新規事業(苗床)への強制参画

「いやっ！ やめて！」

サトコ先輩の悲鳴が上がる。

彼女の豊満な身体が、人間大の機械兵に無慈悲に床へ押さえつけられた。

機械の指先が鋭利な爪へと変形し、自慢のヒップラインを強調していたタイトスカートを黒いTバックごと引き裂く。

「ひいっ……！ お尻が……っ！」

白く豊かな臀部が剥き出しになる。

だが機械兵は構わず、その冷たい鋼鉄の爪を彼女の湿った女の秘部へと容赦なく突き立てた。

「あぐっ……！」

生々しい肉を穿つ音が響く。

逃げなければならないと頭では叫んでいるのに、無機質な鋼鉄が柔らかな粘膜を無理やりこじ開け、ずぶずぶと侵入していく悍ましい結合部から、私の視線はどうしてか吸い付かれたように離れなかった。

ズチュユッ……グチュ、グチュグチュッ——。

重々しい機械的なポンプ音と共に、白濁した粘液が彼女の奥深く、生命を育む器官へと向けて大量に圧送されていく。

ナノマシンが駆動するような微細な金属音と、内側から肉が書き換えられるような気味の悪い水音が私の耳にも届いた。

「な、にこれ……お腹の、奥が……あ、いやっ、孕まされ、るう……っ！ あ、ああああっ！ あたま、とろけちゃううッ！♥♥」

痛みと未知の刺激。

サトコ先輩が全身を痙攣させ、その瞳が白目を剥く。

彼女の下腹部が内側から異様に蠢き、あり得ないほどの大きさに隆起していった。

膣口から溢れた白い液体が彼女の太ももを汚していく。

彼らは未知の兵器を製造するための「苗床」を作ったのだ。

「アヤノ！ こっち！」

蹂躪の恐怖にはっと我に返った私は、震えるアヤノの手を引き、倒れたサーバーラックの影に身を隠す。

だが、別の機械兵がアヤノの足首を背後から掴み取った。

「いやああああっ！」

絶望的な悲鳴が上がり、彼女の身体が床を引きずられる。

「アヤノちゃん！」

私が伸ばした手は届かない。

機械兵はアヤノを引きずり出すと、その腕から鞭状の武装を展開し、彼女の華奢な身体を打ち据えた。

「ひいっ！……あうっ！」

制服のブラウスが裂け、真っ白なフリルのついたブラジャーが露わになる。

さらに別の個体がカプセルを投擲した。

破裂したカプセルから甘ったるい匂いを放つ胞子が散布され、アヤノがそれを深く吸い込んでしまう。

「ん……あ……なに、これ……からだ、が……あつい……♥」

アヤノの抵抗が、徐々に弱々しい喘ぎに変わっていく。

瞳はトロロンと潤み、焦点が合っていない。

理性が未知の暴力的な快楽に溶かされていく。

裂けたブラウスと、その下の薄いブラジャー越しに、彼女の小さな乳首が固く尖っていくのがはっきりと分かった。

助けに飛び出さなければならない。

けれど私は恐怖で足がすくみ、後輩の変わり果てた姿を物陰からまじまじと見つめてしまっていた。

清純だった彼女が、抗えない薬効によって淫らな雌へと堕ちていくその異常な色香から、どうしても目を逸らすことができない。

「いやあ...っ...でも.....あ、ああんっ...きもち、い...♥ おしっこ、でちゃう.....っ♥」

アヤノは無意識に腰をくねらせ、その純白のショーツはすでに恥ずかしい愛液でぐっしょりと濡れ始めていた。

機械兵たちはその光景を無機質なカメラアイでじっと見つめている。

彼らは「美食家」なのだ。

私たちの羞恥、絶望、そして快樂。その全てを「実感」として味わうために、こうして陵辱している。

私は同僚たちが眼前で犯されていく様を、ただ震えながら見ていることしかできなかった。

「非効率」な人材。

何もできないただの事務員。

アヤノが快樂に歪んだ顔で、涙を流しながら私を見た。

「せん、ば……い……あ、イ……イぐう……っ♥」

プツリ、と。

私の中で何かが切れる音がした。

【世界観設定資料:戦場のオフィスレディ】

1. 偽りの平穏とプロパガンダ(聖暦2028年)

大戦の膠着により、世界統合連合は「女性を守るべき英雄である」というプロパガンダを展開し、徹底管理されたクリーンな要塞都市を構築した。

タイトスカートに身を包み、退屈なデータ処理に追われる一般事務員たちは、このかりそめの平和を享受している。

しかし、その安全で無防備な日常こそが、新たなる捕食者にとって最も熟れた「果樹園」に過ぎないことを、彼女たちは知らされていない。

2. 降臨者:アビス・ヘクサ

宇宙の深淵より飛来した、鉄と油の塊のような醜悪な機械の軍勢。

その正体は三次元物理宇宙の外側に存在する高次元精神生命体である。

彼らの目的は破壊ではない。

無の世界から来た彼らは、物質世界における「実感」——人間の恐怖や絶望、そして女性が放つ「性的快楽」と「羞恥心」を至上の美食として渴望し、蹂躪する。

ヘクサ・マシン: 全高18m級の大型形態。

装甲の隙間から「データスパイク」と呼ばれる銀黒の触手を生成し、オルガマシンのコックピットへ侵入。

神経系を物理的にハッキングし、パイロットに強制的な連続絶頂を引き起こす。

ヘクサ・ギア: 人間サイズの歩兵形態。

「インジェクション・クロー(種子注入爪)」と呼ばれる鋭利な指先で逃げ惑う女性の下着を引き裂き、膣の最奥へと直接「ヘクサの種」を注入する。

種付けされた女性は、自らの快楽とエネルギーを糧に異形を育む「苗床」へと作り変えられる。

媚薬孢子(オーガズム・ストーム):

ヘクサ・ギアが散布するナノマシンガス。

吸い込んだ女性の理性を融解させ、強制的な発情状態へと陥れる。

彼女たちの羞恥と快楽をより濃厚に引き出すための「香辛料」として用いられる。

3. 搭乗機体:UNI-201 セクター

連合が運用する中間層向け量産型オルガマシン。

緊急挿入モード:操縦適性Cの非戦闘員(事務員)であっても、下腹部に休眠状態のクリトリスチップが存在する限り、システムは対象を「生体動力炉」として認識する。

正規のパイロットスーツ未着用時、座席のオルガデバイスは高周波振動を開始。

パンティストッキングやレースの下着を無慈悲に引き裂きながら膣内へと強制挿入され、物理的な固定と神経接続を完了させる。

4. オルガ・パラドックスと自律最適化

女性の極限の羞恥や恐怖が、莫大な機体出力と快楽へ強制変換される物理法則。

アビス・ヘクサの干渉や搭乗者のパニックによって戦術行動が不可能と判断された場合、連合の戦術AIは冷徹に『自律最適化』へと移行する。

パイロットの自発的な制御権を剥奪し、デバイスを最大出力で稼働。

搭乗者の意思とは無関係に強制的な絶頂をループさせ、溢れ出る愛液と悲鳴を燃料にして機体を強制駆動させる。

作品名:オルガコードヘクサ:戦場のオフィスレディ

発行日:2026年6月9日

発行者:XYZ_L

連絡先:<https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード(SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む)を固く禁じます。
